

三木權一編輯
作文的例

五

特34

140

079093-000-2

特34-140

作文的例 卷5

三木 權一/編

M13.11

DAC-3007



東京府師範學校教員
三木權一編輯

作文的例

卷之五

特34
140

緒言

此ノ卷ハ專ラ蒙士ノタメニ雅文ノ体制ヲ
記載セシモノナリ夫レ作文ハ美ナリト雖
モ若シ其体制ヲ失セバ何ソ文章トナスニ
足ランヤ譬ヘハ人ノ言語ニ於ルカ如シ各
々其當ル所アリ如シ火ヲ救フニ當ツテ微
音緩語前ヲ慮リ後ヲ顧テ而シ後ニ發スル
カ如キ片ハ其機ヲ誤テ言語ノ用ヲナサズ
作文ノ法モ亦此ニ似タル者アリ今爰ニ又
卷中ノ部分ヲ逐フテ其体制ヲ説キ以テ一

緒言

此ノ卷ハ專ラ蒙士ノタメニ雅文ノ体制ヲ
記載セシモノナリ夫レ作文ハ美ナリト雖
モ若シ其体制ヲ失セバ何ソ文章トナスニ
足ランヤ譬ヘハ人ノ言語ニ於ルカ如シ各
々其當ル所アリ如シ火ヲ救フニ當ツテ微
音緩語前ヲ慮リ後ヲ顧テ而メ後ニ發スル
カ如キ片ハ其機ヲ誤テ言語ノ用ヲナサズ
作文ノ法モ亦此ニ似タル者アリ今爰ニ又
卷中ノ部分ヲ逐フテ其体制ヲ説キ以テ一

目瞭然ナラシム而ノ其ノ文辞ハ勉テ俗語
ヲ用ヒテ幼學ノ解シ易キヲ要スト云フ

書牘說

書牘ハ古代ヨリアレ凡實ニ書面ニ載セテソノ
文句ノ見ルベキハ春秋ト云フ支那ノ中古ノ時
ニ始マリテソノ後時代々々ニヨツテ尺牘トモ
書尺トモ云ツテ名ハカハレ凡今日用ノ書面ノ
事ナリソレ故ニ書牘ノ書キヤフハ人ノワカリ
易キヲ主意トシテ何分簡要ヲ摘ミテ餘リ枝葉
ノ付ヌヤフニカクモノナリサレバ文章ニハ何

レノ体ニモ記事ト議論トノ二種アリテアリシ
マノ事ヲノブルヲ記事ト云フソノ事ニ就テヨ
シアシノ評判スルヲ議論ト云フ巧者ノ上ニハ
記事ガ議論ニナルトモアリ入り雜リナルモア
リ書牘モ言語ノヤリトリナレバ議論モアレ凡
大抵ハ穩カニワガ意ヲ云ヒノベテ記事ノ方が
オモニナリイッマテモ向フノ人ガ相手ニナリ
オルツモリニテ人情ノヨロコバシキヤフニカ
ドタ、ヌガモチマヒナリ

紀事說

此モ同シ記事ト云フ中ニモ文章ノ一体ニシテ
別シテ議論体ヲ忌ムモノナリ此ノ体ハ唐ヨリ
盛リ始メタルモノト見ヘテ追々議論体ガ始マ
リ文ハヨケレト其ノ体制ヲ失ヒタリト古人モ
評判シテオケリサレバ此ノ体ハ字義ノ通り成
ル丈ケ叙事体ニアリシ事ヲソノマ、カキツ、
ルモノト知ルベシ但シ巧者ノトリマハシニテ
議論モ入ル事アレト譬ハ是ノ時ニ某ガ膝夕
テナオレ云々ノ話ヲシテアリタカ聞ク人々ハ
實ニ尤ト感心シタリトトリマハセバソレデ評

判ハツケ氏ヤツハリ叙事ノ体制ナリ然ルニ此
ノ記事ト云フ中ニ一種ノ体アリテモトハ曆史
ノモレタル事ナトヲ見タナリ聞タナリ記録シ
テオク名目アリコレモ免角叙事ノ体ニテ必竟
同シ文体ナレバ何レニモアリノマ、ヲ書キア
ラハス者ト知ルベシ

祝辭說

元來祝辭ハ神ノ祭リナトニ其功德ヲホメタテ
、祈リ求ムル辞ナレバホムル心ト願フ心ヨリ
成リ立ツ文章ナリ是迄ハカクアリタルガ追々

モカクアリタシ又ハ將來カクアルベシナト、
凡テ喜ビ事慶ヒ事ナトヲ祝スル文ナレバ何分
苦マヌ文字ヲ使フテ作ルハアタリマヒナリ但
シコレモ場所ニヨリ巧者ノ上ニハ種々ノ取り
廻シアルベシ

論說解

論ハ議論文ノ一体ニシテオモニヨシアシノ評
判ヲ遂ケテ理合ヒテ明白ニスル文章ナリサレ
バソノ事ノ義理ノ明白ニナルマテハ一言ニ盡
キサレバ幾回モクリカヘシコマカナル中ニモ

オク深キ心ヲ含ミ順ニ論シテワカリニクケレ
バ逆ニ取り廻ハスヲモアリ何レモ理非ノ評判明
白ナルヲ旨トスルモノナリ巧者ノ上ニハ別段
ナレ氏初心ノ誓古ニハ長ク華ヤカナルヲ良ト
ス説モ同様ノ文体ナレ氏此ハ論ニ比スレハ少
シ短キガモチマヒニテサリトテモ亦ワカラヌ
中ニ説キ仕舞フヤフノ事ニアラズツマリアリ
シ事ニ就テ己ノ意見ヲ述ベサマガマニ取り廻
シ残ル所ナク説キ明スハ説ノモチマヒナレバ
ツマリ論ト格別ノ異同アルモノニアラズト知

ルベシ但シ元來ハ書物ナトニ餘リ言不足ニテ
ワカリニクキ所ヲ説キ明スヨリ出タル文体ト
云ヘリ

序跋説

序ハ前書キナリ一部始終ヲ讀ミテ此ノ書ハ如
何ナル物ト見取リタル上ハ何ニモ子細ナケレ
氏ソレハ讀ミテ後ノ事ニシテ讀マノサキニ此
ハ斯ノ事ヲ書キタル書物ナリト一目ニ解スヤ
フニ前書キシテオクナリコレモ叙事議論ノ二
種アレ氏何レモ一部ノ簡要ナル所又ハ讀ミ方

ナドヲ無用ノ言ナシニ書キノスルモノナリ跋
ト云フモ同シ様ナレ氏後序ノヤフナル類ニテ
後ニ書クモノナリ元來ハキビスト云字義ヨリ
出タレバ書ノ跡ニ著クコトワリ書キヲ云フ但
シ此ハキリ短カニソノ書ニ付テ人ヨリ序文ナ
トモ備ハリタルモノヘ一言セヨト請ハレタリ
又ハ己ガ讀ミ終リタル片ナトニ感心スル所ア
リテ一言ソノ書ノキビスニ著ケオクナリ巧者
ノ上ハ此モ隨分手際モノナリ

祭文説

祭文ハ祭祀ノ片ニ吾カ祭リヲ受ケガシト靈位ニ祈ル文ナリ吾ガ祭ル由來ヲ述ヘテソノ中ニハ親族朋友ノ死セル人ノ言行ナトモカキコミマシメニカナシキ心ヲ含ミカキタツルモノナリ餘リ書キ過クレハマジメナル誠ガナクナリサリトテ心ニカナシム鬱陶シキ辞ナケレバ是モ實情ガ盡キズ何分ニモマジメニカナシム意ガ祭文ノ主意ナリ讀ム者宜シク前ニ述ル所ノ大主意ヲ解シテ而ノ後ニ本文ヲ熟讀スヘシ

作文の例卷之五目次

雅文體

書牘部

- 某新聞社ニ謝スル書 初丁○社友ト夜話會ヲ催スル書 日
- 洋行ノ親交ヲ戒ムル書 二、
- 家姪ノ某縣ニ在官スルニ與フル書 二、
- 都下ニ遊學シテ郷里ニ寄ル書 二、
- 倫頃留學ノ知己ニ與ル書 三、○某先生ニ上ル書 日
- 少年生ヲ督促スル書 四、○書画ヲ好ム者ニ與ル書 四、
- 某翁ノ演說場ニ赴クヲ約スル書 五、

○漁獵ノ誘ヒヲ辞スル書五、○藏書家ニ與ル書 六、

記事部

- 墨堤二月ヲ賞スル記 七、○品川ニ瀛車ヲ觀ル記 月
- 海安寺ニ楓ヲ觀ル記 八、○三縁山中所見ヲ紀ス 月
- 靖國社ニ詣ル記 九、○猿樂ヲ觀ル記 月
- 山莊小集ノ記 十、○書籍館縱觀ノ記 月
- 某郷學ニ遊フ記 十一、○柳瀬ノ七槍ヲ記ス 月
- 合衆國始テ國号ヲ建ルヲ紀ス 十二
- 信長能ク諫ノニ從フヲ記ス 月
- 佐藤直方直言ヲ記ス 十三、○熊澤蕃山ノ事ヲ紀ス 月

○夏目長右衛門ノ忠死ヲ記ス 十四

○土倉市正中村忠左衛門ヲ勸ムルヲ記ス 十四

○浅井暁ノ戰ヲ記ス 十五、○川中島ノ戰ヲ記ス 月

○破缸柴田ノ奇策ヲ記ス 十六

○徳川氏殉死ヲ禁スルノ因原ヲ記ス 月

○玉淵川ノ戰ヲ記ス 十七

○立花道雪天神壇ノ軍ニ死スルヲ記ス 月

○秀忠能ク諫メニ從フヲ記ス 十八

○第一銀行ノ記 十九、○太陰曆ヲ廢スル記 月

○大坂ノ役ヲ記ス 二十、○秀吉鎌倉ニ遊フヲ記ス 廿一

祝辭部

- 某氏ノ子初メテ學ニ上ルヲ祝ス 廿一
 - 小學校開業ノ祝辭 廿二 ○新年ノ祝辭 廿三
 - 新春ノ祝辭 廿四 ○男子ヲ産ムヲ祝ス 全
 - 女子ヲ産ムヲ祝ス 廿四 ○某翁ノ八十初度ヲ壽ス 全
 - 人ノ古稀ヲ祝スル辭 全 ○友人病愈ヲ祝ス 全
 - 某橋落成ノ祝文 廿五
- 論說部
- 寸鐵人ヲ殺スノ說 廿五 ○水ノ說 廿六
 - 電信機ノ說 全 ○挿秧ノ說 廿七

- 文ノ說 全 ○良禽木ヲ擇フノ說 廿八
- 水ハ器ニ從フ說 全 ○習ヒ性ト成ルノ說 廿九
- 難ヲ先ニスルノ說 全 ○利害ノ說 三十
- 循環ノ說 全 ○醉客ノ說 三十一
- 人ヲ敬スル者人恆ニ之ヲ敬スルノ說 全
- 習テ不察ノ說 三十二 ○家康論 全
- 秀吉論 三十三 ○信長論 全
- 室町氏論 三十四 ○北條氏論 三十五
- 源氏論 三十六 ○平氏論 全
- 藤原氏論 三十七 ○正成論 全

○隆景論 三八〇 頭家ノ論 全

○義助論 三九〇 元就論 全

○旦元論 四一〇 幸村論 四十一

○學問ノ主義ヲ論ス 四二〇 文章モ亦久クベカラサルヲ論ス 全

○疇昔ノ善特ムベカラサルヲ論ス 四十三

○隱タルヨリ著ハレタルハナキノ論 全

序抜之部

○瀛環史略ノ序 四四〇 國史略序 四十五

○政記ノ序 四五〇 某氏ノ習字帖ニ跋ス 四十六

○頼翁新居帖ニ跋ス 四十六

○顔真卿法帖ニ跋ス 四十六

○日本地誌略ニ跋ス 四十七

○日本立志編ノ後ニ書シ 四十七

祭文

○大祖ヲ祭ル文 四八〇 先君ヲ祭ル文 四九

○祖母ヲ祭ル文 全 〇某先生ヲ祭ル文 全

○友人ヲ祭ル文 五十〇 幸村ヲ祭ル文 全

以上

作文的例卷之五目次終

作文的例卷之五

雅文體

書牘部

某新聞社ニ謝スル書

日來貴社第若干号ノ社説ニ依テ疑團ノアル所
 ヲ質問スルニ來諭明白餘地ナシ圭服ニ堪ヘズ
 曾テ新聞社ノ体制ヲ分析スレバ天下ノ小耳目
 ヲ集メテ一滾ノ大耳目トナシ以テ世人ノ博識
 ヲ裨補スル者トス若夫ノ時事ノ得失人民ノ利

害ニ至テハ社説アツテ以テ江湖ニ問フ若シ疑
團ヲ抱ク小生ノ如キモノアルニ至テハ反復數
四至當ニ歸シテ止ム今日ノ如ンバ貴社ノ隆運
足ヲ企テ待ツベシ勿卒不盡

社友ト夜話會ヲ催スル書

我カ社友日常ノ課業已ニ教師ノ善誘ニヨツテ
歩ヲ進ムルヲ得タリ如此ニシテ俛焉ト怠惰
セズンハ早晚成業ノ期ニ到ランハ誰カ疑ヒヲ
容レンヤ僕更ニ冀クハ夜話會ヲ設ケ從容笑談
ノ際ニ十年ノ疑義一夜ニ冰釋スルノ奇功ヲ取

ラント欲ス僕自ラ謂ラク必ズ有益ノ會ナリト
諸君以テ如何ントナス幸ニ所見ヲ吝ム勿レ

洋行ノ親交ヲ戒ムルノ書

歲月不待人トハ歲月ノ暮レ易ヲ歎ズルノ辭ニ
シテ多錢善賣トハ資本アル者ノ志ヲ得ヤスキ
ニ喩フルナリ今足下少年ノ歲月ヲ以テ海外ニ
遊學スルノ資本アリ社中籍々其ノ榮ヲ歌ハザ
ルハナシ老婆心竊ニ祈ル君ガ志操是ニ至テ愈
堅ク内ニハ自ラ慢スルノ心ナク外ニハ物ニ屈
スル志ナク始終一ノ如クニシテ洋行生ノ華有

テ實ナキガ如キノ覆轍ヲ踐ムヲナカラシムヲ幸
ヒニ自重セヨ拜白

家姪ノ某縣ニ在官スルニ與ル書

日月勿々己ニ秋ニ驚ク貴侯恙ナキヤ否ヤ此地
舉族無事就中尊慈瞿鑠トシテ日夜卿ガ政蹟ヲ
著ハシテ故郷ニ錦歸スルヲ望ム使伴前途ヲ促
シ一ニ紙上ニ盡スニ暇アラズ千萬慈母ノ盛意
ヲ諒シテ汗名ヲ貽ス勿レ不悉

都下ニ遊學シテ郷里ニ寄ル書

羈窓ニ遠夢ヲ勞シ家山ヲ辞セシヨリ定省ヲ欠

ク于今幾年回首シテ此ニ思ヒ及フ毎ニ胃ニ鍼
砭ヲ受ルガ如シ幸ヒニ昆弟姪姝ノ養ニ供スル
有テ不肖ノ漫遊ヲ縱ニスルヲ得タリ懐ニ忘ル
能ハズ過去ノ來歴ヲ叙シテ更ニ將來ニ請フ所
アラントス冀クハ不肖ニ假スニ一二年ヲ以テ
セヨ必ス所生ヲ忝ソサラントス時ニ四序和ヲ
失ヒ寒暄時ヲ誤ル切ニ自愛シテ家庭ノ平安ヲ
報セヨ頓首

倫頓留學ノ知己ニ與ル書

我カ知己某君近日來起居何似ナルヲ審ニセズ

一日横港ニ某生ヲ訪フ某生僕ニ語ルニ足下ノ
近状ヲ以テシル頗ル詳悉ス某ノ説ニ擬レハ足
下名ヲ海外ニ馳スル遠キニ非サルバシ迂生區
々一隅ノ霸ヲ競フニアラズ願クハ他日今ノ足
下ハ古ノ足下ト迥カニ異ナルヲ觀テ聳然ト心
ヲ動シ少シク自ラ振拔スル所アラシ是ヲ之レ
望ム若シ好會ヲ得テ名都ノ近況ヲ惠示セバ亦
夕望外ノ幸也不蕪

某先生ニ上ル書

某再拜ノ書ヲ某先生ノ梧石ニ奉ス方今ノ世苟

モ横目豎鼻呼テ人ト做スモノ雅俗トナク朝野
トナク悉ク皆先生ヲ推シテ泰山北斗トナシ一
言一句都テ奉ノ金科玉條トナス某譎劣ノ一寒
生ヲ以テ敢テ喋々シテ顧テ先生ノ德望ヲ瀆ス
ニ非ズ欽慕ノ止ム能ハサル門牆ヲ窺フヲ得サ
ルノ餘ニ出ツ糞クハ門下ニ出入シテ餘風ヲ望
ヲ得ハ實ニ望外ノ賜也敢テ腹心ヲ布ク恐懼再
拜

少年生ヲ督促スル書

允ソ父母トシテ其子ヲ愛セサルハナク子トシ

テ其父母ヲ慕ハサルハナシ是レヲ人間ノ真情ト云フ今父母ノ君カ輩ヲシテ難得ノ貨財ヲ費シ不屈ノ肢節ヲ折リ以テ我カ門ニ托シテ遺憾ナシトスルハ抑々何ノ謂レゾヤ然ルヲ君カ輩游惰ニ流レ動スレバ運動ト唱ヒ散歩ト名ケ貴重ノ光陰ヲ費ス尠カラズ今ヨリ自ラ勉勵シテ他日ノ悔ヒヲ取ルナカレ

書画ヲ好ム者ニ與ル書

某白ス吾兄座下前日手書ヲ辱フス曰々其他ノ嗜ム所ナシ唯名蹟古畫ヲ好ムト文人墨客ノ興

ヲ寄スル此ヨリ雅ナルハナシ佳癖ト云フベシ然レモ業成リ課終ヘテ目ヲ喜バシムルノ一餘事ノミ我カ輩今ノ時ヲ如何ナル時トナスヤ日夜孜々トシテ課業ニ暇アラス乃チ悠々書画ニ耽リ空シク赤日ヲ消費シテ可ナランヤ吾兄更ニ思ヘ此レ區々ノ事豈ニ業ヲ害セント云フニ至テハ正ニ是レ自ラ惰ノ一說ナリ況シテ少年輩ノ嗜ムヘキ所ニアラサルヲヤ兄以テ如何ト爲ス不肅

某翁ノ演說場ニ赴クヲ約スル書

某啓ス某翁來月初三ヲ以テ演說ヲ某樓ニ開ク
ト云フ蓋シ我カ友人某ノ報スル所ニ係ル某ノ
翁ニ於クルヤ親シク薰陶ヲ受クルモノニシテ
又僕カ翁ノ人トナリヲ詳カニスルヲ得ル所以
ナリ然レハ則チ今回ノ演場ハ必ス名說ノ人心
ヲ厭カシムルニ足ルモノアリ尋常一樣ノ枯說
ニ非サルヲ信ス僕素ト聞クヲ願フ君モ亦遲々
スヘカラス爲メニ專使ヲ勞シ不罄

漁獵ノ誘ヒヲ辞スル書

品海即今獲モノ多キト云フ由テ好風日ヲトシ

テ從游ヲ命セラル僕素ト此ノ樂ミニ耽リ寢食
ヲ忘レ于網于釣幾星霜ヲ經過セリ頃者少シク
警戒スル所アリテ多年ノ迷夢一夕ヒ覺メ凜然
トシテ背ニ汗シ措ク所ヲ知ラサル者ノ如シ是
ヨリ其後心ニ誓テ此ノ宿好ヲ絶ッ遽然トシテ
命ニ應ゼサルヲ以テ他腸アリトナスナクシバ
幸ヒ甚シ不宣

藏書家ニ與ル書

某拜啓ス某君座下君家祖先以來讀書人種ニ富
ミ今ニ至テ家聲ヲ隆サス子孫百年ノ計如此ナ

ルベカラズヤ人ヲシテ嘆羨ノ情ニ堪サラシム
是ヲ以テ文房久ク輝ヲ揚ケ長ク光ヲ添フ郷里
文房ノ富ミヲ數レバ君家ヲ以テ稱首トナス僕
壯年ニシテ始テ學ニ志シ一二ノ家藏己ニ業ヲ
竣フ復夕讀ムヘキモノナシ愛惜必ス古訓ニ背
カズ若シ缺壞アラハ即チ爲メニ補治セシ己ニ
讀ム者ハ未夕讀サル者ニ換ヘ某書ヨリ始メ卷
ヲ逐テ漸次ニ寓目ヲ得バ是レ其恩ノ重キ師家
ニ均シ君能ク北阮ノ貧ヲ憐ムヤ否ヤ又手々々

記事部

墨堤二月ヲ賞スル記

東京ノ勝地ヲ東台ト曰ヒ三縁山ト曰ヒ墨陀川
ト曰フ而シテ墨堤ヲ巨擘ト爲ス一日閑ヲトシテ
東台ニ游ヒ山上ニ倘佯シ歩倦テ佇立シ遙ニ淺
草ヲ望ミ浩然トシテ墨陀ノ遊ヲ想フ孤筇相伴
ヒ遂ニ墨陀ニ至レハ則日己ニ西ニ落ツ萬象昏
黒余ガ遊ノ遲キヲ恨ム既一ノ海月徐々ト東隅
ニ出ツ顧テ嚮キノ昏黒ナル者ヲ見ルニ清風水
ヲ渡リテ微波動キ漁舟金ヲ碎ヒテ棹影明カ墨
堤三勝ノ首ニ居リ而シテ月ヲ賞スルニ於テ最其

奇ヲ談スベシ是ニ於テカ記ス

品川ニ瀛車ヲ觀ル記

邦家維新ノ際百度手ヲ並ヘテ舉リ宿弊ヲ除ヒ
テ文明ノ域ニ進ム而シテ西洋ノ法ヲ參酌スルモ
ノ十ニシテ七八ニ居ル瀛船本ト西洋航海ノ一大
利器ニシテ此ヲ陸路ニ施シ萬里瞬息ニ通シ人
々其便ニ驚目セサルハナシ余偶々品川ニ往ク
轟々聲アリ小板屋ノ如キ者七八ヲ連ネ一銅簞
高ク前ニ聳ヒ拂々煙ヲ吐キ嚮ニ見テ千萬畝ナル
者須臾ニシテ眼下ニ在リ忽チ亦之レヲ目送シ

何ソ其速ナルヤ瞠然之ヲ久ラス

海安寺ニ楓ヲ觀ル記

海安寺ハ南品川ノ一梵刹也楓ヲ以テ名ヲ著シ
奇ヲ探ル者遊賞セサルハナシ余友人ト期ヲ刻
シテ同游ヲ約ス是ノ日ヤ天清ク氣爽カ飄然ト
相携ヒ先後笑談シテ脚ノ勞スルヲ忘ル寺中荒
廢シテ其ノ名ニ稱ハズ蕭然トシテ復タ一游客
ヲ見ズ余怪テ雛僧ニ問フ曰ク此ノ寺近古火災
ニ罹リ復タ故ノ如クナル能ハズ楓樹半ハ朽チ
テ五六株彼ニ在リト世上能ク名ニ負カサル者

幾ト希レナリ豈ニ此寺ノミナランヤ感ズル所
アリテ之カ記ヲ作ル

三縁山中所見ヲ紀ス

几案ニ肱シテ紙筆ヲ弄シ倦來レハ意ニ隨ヒ脚
ニ任セ緩節散步スルハ是レ余ガ世ヲ渡ル所ナ
リ例ニ依テ戸ヲ出ツ偶三縁山ヲ過ギル夫民一
僵松ノ長サ七十餘尺ナルヲ運搬セントス夫民
ノ數五人ニ過キズ大綱ヲ松身ニ繫ケテ運搬セ
ント欲スル所ニ引キ杖シテ之ニ纏フ又最下ニ
板ヲ置キ其上ニ數木ノ横木ヲ施シ其上ニ縱横

ニ短木ヲ累ネ恰モ井ノ字ノ如シ如此モノ頭尾
ニ在リ其上ハ即チ松身ナリ杖頭ノ機ヲ轉ノ綱
ヲ牽キ衆横木從テ轉シ夫民急ニ横木ノ後ナル
者ヲ取テ前ニ架シ松身徐々ト進ム物其ノ法ヲ
得レハ重キ者ヲシテ輕カラシムベシ記シテ以
テ他日ノ考証ニ供ス

靖國社ニ詣ル記

招魂社ハ我カ兵ノ國難ニ死スル者ヲ祭ル所ナ
リ近時改號シテ靖國社ト云フ富士見坂ノ上ニ
アリ死者ノ魂魄ヲ招ヒテ此ニ祭ル故ニ招魂ト

云フ死ヲ致シテ國家ノ難ヲ靖シズ故ニ靖國ト云フ歳時ニ祭ヲ致ノ情ラズ死者ニシテ知アラバ永ク國礎ヲ冥々ノ中ニ鎮護シテ天壤ト盡ルナカラシ是レ其レ号ヲ改メテ靖國ト云フ所以ン歟

猿樂ヲ觀ル記

靖國社ニ時祭アリ臨時祭アリ皆競馬相撲及ヒ猿樂ヲ張ルヲ以テ恒例トナス某年月日臨時祭ヲ行フヲ以テ三場ニ供帳シ猿樂場ヲ社後ニ設ク余毎ニ他ノ二場觀ル者堵ノ如ク立錐ノ地無

ヲ以テ必ズ猿樂ヲ觀ル一士人ノ遠行セントスルアリ盲某輩某ヲ召メ留守セシム二人命ヲ受ケテ始メ甚タ親ミ既ニシテ輩其ノ眼ヲ恃シテ盲ヲ欺キ盲ソノ耳ヲ恃シテ輩ヲ紹リ遂ニ隙ヲナシテ其終ヲ全フスル能ハス記シテ以テ鑑戒トナスト云フ

山莊小集ノ記

本日日陽ニ属シテ兩三友某ノ山莊ニ相會シ此ノ莊ヤ深溪ニ枕ミ高山ヲ負ヒ松竹扶疎トシテ清風來リ奇峰突兀トシテ南天ニ聳ヒ自ラ塵習

ヲ洗フニ足ル一友人ノ曰ク以テ詩ナカルベカ
ラズ是ニ於テ各々自ラ料ヲ採リ材ヲ選ヒ彩華
競ヒ開ク余ヤ賦才ニ乏シ聊カ記ノ以テ其責ヲ
塞クト云フ

書籍館縦觀ノ記

書籍館ハ舊ノ所謂聖廟也徳川氏ノ時ニ當テ儒
士ヲシテ麾下ノ爲メニ書ヲ講セシメ列藩有志
ノ臣士ヲソオヲ研キ藝ヲ闘ハシムル皆其ノ傍
ニ在リ今ノ所謂東京師範校ナル者是也余赤貧
ニメ書籍ニ乏シ往テ縦觀ヲ請フ再三蓋シ家ニ

三萬軸アリト雖モ未タ其ノ万一ヲ髣髴スルニ
足ラズ頤ヲ支エテ黙讀スル者アリ筆ヲ操テ騰
寫スル者アリ千狀萬形一ニシテ足ラズ然リ而
モ令嚴ニシテ堂宇ノ間肅然ト聲ナシ國家ノ人
材ヲ成サント欲スル亦想ヒ見ルヘシ

某郷學ニ遊フ記

東京ノ小學校タル體製率ネ異ナル所ナシ僻邑
窮郷ト雖モ一定ノ教育法ニ據ル片ハ推知スル
ニ足ル是レ余カ平生ノ思想スル所ナリ今該郷
ニ到リ幸ヒニ教育ノ方法ヲ觀ルニ體製甚タ善

ヲ盡スト云ヲ得ズ然モ淳樸ノ生徒能ク師命ヲ奉シ著實ノ師氏善ク後生ヲ誘クハ郷校ノ實アル者ト云ハサルヲ得ズ世ノ輕薄生ニ告テ警戒ノ一斑トナス此ノ如シ

柳瀬ノ七槍ヲ記ス

作久間盛政既ニ中川清秀ヲ柳瀬ニ襲殺シテ捷ヲヲ柴田勝家ニ報ス勝家頻ニ使ヲ遣ハシ速ニ兵ヲ收メシム盛政傲然トメ聽カス時ニ秀吉長濱ニ在リ柳瀬ノ飛報ヲ聞キ即時ニ鞭ヲ舉テ馳ス賤岳ニ到レハ日己ニ暮ル盛政大ニ驚キ兵ヲ

收メントス秀吉進テ之ニ迫ル福島市松加藤虎之介加藤孫六郎片桐助作平野權平脇坂甚内槽谷助右工門最モ奇功アリ世ニ之ヲ七本槍ト稱スト云フ

合衆國始テ國号ヲ建ルヲ紀ス

洋曆一千七百七十六年十三國ノ議員會議シテ曰ク我レ英國ニ叛ヒテ自立ス而ノ未タ國号ヲ建テサル者ハ英王ノ過ヲ悔ヒ衆ニ謝スルヲ望メハナリ而モ今ニシテ英王益々怒リ日夜兵食ヲ發ス其意ヲ推スニ悉ク新地ヲ取ルニ在リ而シ

我レ尚ホ英王ノ過ヲ悔ンヲ望ムハ難カラズヤ
是ニ於テ國ヲ合衆國ト云フ此ヲ米利堅獨立ノ
始ト爲ス

信長能ク諫メニ從フヲ記ス

初ノ平手政秀諫テ死ス信長深ク悔恨シ非ヲ悔
ヒ過ヲ改ム既ニシテ兵強ク威振ヒ近畿悉ク服
ス左右皆曰ク政秀徒死憲リナキ者ト謂フベシ
我カ公能ク強大ヲ致シ今日ノ如ナルヲ見ルニ
及ハズト信長怒テ色ヲ變シ曰ク吾能ク今日ヲ
致スモノハ政秀諫死ノカニ由ル汝カ輩何ソ徒

死ト謂フヲ得ンヤト信長ノ強大ヲ致スヤ偶然
ニ非サル也

佐藤直方直言ヲ記ス

佐藤直方ハ山崎闇齋ニ師事シ崎門三哲ノ稱アリ
曾テ井伊掃部頭ノ禮遇ニ應シテ接見セシト
スルニ當リ伊井氏長臣ト語リテ未タ終ラズ直
方直チニ喙容ル曰ク大事ハ言ヲ待タス凡ソ事
小ナリト雖ヘ凡皆師受シル所アリテ其事ヲ脩
メ其法ヲ憲リ而シテ後ヲ能ク得ル今我カ日本入
ノ如キハ徒ニ一己ノ意匠ヲ以テ國家ヲ截制シ

夫レ政ハ萬民ノ命ニ係ル學問ナクシテ之レヲ
行フ豈ニ危カラズヤ滿堂肅然ト容ヲ改ム

熱澤蕃山ノ事ヲ記ス

芳烈公ハ池田侯ニシテ世ニ稱シテ岡山ノ新太
郎君ト云フ寛永年中天下三君ノ名アリ蕃山仕
ヘテ功名一時ニ喧シ初メ蕃山年二十四中江藤
樹ニ學ブ實父野尻利一母妹ヲ蕃山ニ托シテ江
戸ニ赴クニ及ンテ糟糠尚ホ飽カザルノ窮ニ迫
リ屢々餓死セントスルニ至ル者凡ソ五年正保
二年再ヒ芳烈公ニ仕ヘテ三千石ニ食ミ政績赫

々トノ今ニ到ル

夏目長右衛門ノ忠死ヲ記ス

箕形原ノ役ニ徳川氏大ニ敗レ師サ濱松ニ潰ヘ
走ル時ニ黃驄馬ノ一將屢々軍ヲ返サント欲ス
ルアリ甲將秋山伯耆兵士ニ令メ之レヲ撃タシ
ム左右家康ノ急ナルヲ見テ殊死シテ戦ヒ且ツ
殲ントス家康自ラ免ルベカラザルヲ計リ豨突
ノ敵ヲ侵サントス夏目長右衛門馬ヲ扣ヒテ諫
メ馬首ヲ濱松ニ轉シ鞭シテ之ヲ驅ル自ラ留テ
之レニ死ス後ニ芳烈公稱ノ忠死トナス君子芳

烈公ヲ謂テ言フ知ルト云フ

土倉市正中村忠左衛門ヲ勸ムルヲ記ス
土倉市正ハ岡山侯ノ老臣タリ新太郎君ニ仕ヘ
テ信任スル所トナル新太郎君某官ヲ命セント
欲ノ其人ヲ得ズ之レヲ市正ニ謀ル市正忠左ヲ
勸メ君之レニ從フ市正平日忠左ト善カラズ或
人忠左ニ語ルニ市正忠左ヲ勸ムルノ狀ヲ以シ
忠左悔心色ニ動ク或人又之レヲ市正ニ報ズ市
正曰ク市正國ノ爲メニ才ヲ舉ク一匹夫ノ私怨
固ヨリ此事ニ干渉セズト芳烈公蓋世ノ英主夕

リ此君ニシテ此臣アル未タ怪ムニ足ラス

淺井暁ノ戰ヲ記ス

前田利長己ニ大聖寺ヲ陷レ將ニ還ラントス其
將山崎某路ヲ淺井暁ニ取ル松平久兵衛執テ不
可トス聽カズ敵將隘ニ乘メ之ヲ要撃シ利長ノ
陳大ニ敗ル大田但馬前軍ヲ還メ之ヲ援フ水越
縫殿介槍ヲ提ケテ先登シ久兵衛又進テ其前ニ
在リ兩軍交々退ク利長先登ノ功ヲ賞セントス
二人相譲リテ受ケズ利長聞テ嘆メ曰ク其ノ武
ニハ及フベシ其讓ニハ及フベカラスト久兵衛

幼ヨリ兵書ヲ讀ミ食頃モ懈ラズト云フ

川中嶋ノ戦ヲ記ス

永祿四年七月廿四日謙信進テ西條山ニ軍ス信
玄廣瀬ヲ渡テ貝津城ニ入ル九月九日深夜ニ謙
信兵ヲ川中島ニ出ス翌日信玄兵一万ヲ引テ筑
摩川ニ突出ス謙信麾下ヲ進メテ信玄ノ麾下ヲ
突キ大ニ之ヲ敗ル初メ越謀還リ報メ曰ク信ノ
士心一ナラス和利岳ノ役ニ士卒多ク傷クト謙
信諸將ヲ會メ所見ヲ問フ各々書メ以テ答フ謙
信分テ三等トナス謂ラク上策ハ既ニ敵ノ察ス

ル所タリ中策ハ多年謀議スル所ナリ乃チ此役
下策ヲ用ユト云フ

破缸柴田ノ奇策ヲ記ス

永祿十三年佐々木兼禎長光寺ノ城ヲ圍ミ遂ニ
外郭ヲ破ル城ハ柴田勝家ノ守ル所ナリ勝家牙
城ニ在ツテ防戦甚タカム土民軍門ニ兼禎ニ説
テ曰ク城水ニ乏シ出テ汲サルベカラス如シ汲
道ヲ断タバ城自ラ陥ラント兼禎ソノ計ニ從フ
城中甚タ困ム而シテ困ム色ヲ見ス兼禎事ニ托ソ
使ヲ遣ル使者盥ヲ請フ勝家左右ヲメ満缸ノ水

ヲ供セシム鹽シ終レハ則チ之ヲ覆タシム使者
還リ報シ兼禎怪テ其故ヲ知ラズ既ニシテ城中
水竭リ勝家諸士ヲ會メ置酒シ儲フル所ノ水ニ
斛許リヲ出シ飽マテ衆ニ飲マシム而メ後眉尖
刀ノ鐵ヲ以テソノ缸ヲ碎キ必死ノ志ヲ決メ遂
ニ兼禎ノ軍ヲ敗ル時ニ稱メ破缸柴田ト云フ

德川氏殉死ヲ禁スルノ因原ヲ記ス

寛文三年德川家綱天下ノ殉死ヲ禁ズ後世稱メ
盛徳ノ事トナス而メ其ノ原ツク所アルヲ知ラ
ズ初メ水戸ノ威公薨シ旧俗ニ仍テ殉死セント

欲スル者多シ西山君自ラ某ノ家ニ至リ百方喻
シ止ム事幕府ニ聞ヘ尋テ此ノ令アリト云フ

玉淵川ノ戦ヲ記ス

淺井長政齊藤龍興ト玉淵川ヲ夾テ陳ス長政選
兵五百ヲ遣リテ関原野上ノ宿ヲ焚ク龍興ノ兵
一萬許リ長政又選兵百人許ヲ遣リ敵背ニ出シ
メ自ラ兵四百許ヲ以テ夜龍興ノ陳ヲ襲フ背後
ノ兵又來リ撃ツ龍興内應アリト謂ヒ遁レテ岐
阜ニ還ル長政進テ大垣ヲ攻ム龍興兵ヲ引テ出
ツ長政輕卒三十人ヲ選テ樽井ノ民家ニ匿ス自

ヲ兵ヲ引テ佯リ退ク龍興樽井ニ入テ餐ヲ傳フ
輕卒時ニ乘ノ火ヲ行ヒ長政又不意ニ出テ遂ニ
大ニ龍興ノ軍ヲ敗ル是ヨリ龍興長政ノ兵ヲ怖
レテ復タ出ル能ハズ長政能ク戰フト雖ヘ氏龍
興ヲシテ敵手タラシメハ必シモ如此ナル能ハ
ス他日信長ノ爲メニ敗亡ヲ取ル以テ見ルベシ

立花道雪天神壇ノ軍ニ死スルヲ記ス

立花道雪ハ世々大友氏ニ属ス大友氏衰テ將士
離心解体シ獨リ道雪心ヲ變セズ天正十二年大
友宗麟猫尾ノ城ヲ圍テ拔ケズ兵氣大ニ衰テ道

雪高橋紹運ト相謀リ赴キ援ハントス紹運ハ筑
前岩屋ノ城主ナリ敵地數十里ヲ逾ヘ筑後川ヲ
渡リ遂ニ宗麟ノ陳ニ達ス然レモ宗麟ノ軍復タ
振ハズ遂ニ豊後ニ還ル道雪軍ヲ懸ケテ明年ニ
至リ軍ヲ此野村天神壇ニ移シ病テ死ム年七十
二道雪將士ニ遇スルニ恩アリ將士爭テ殉セン
ト欲ス原尻宮内衆ニ語テ曰ク諸君唯名ヲ務メ
徒ニ死スル以テ忠ト爲スカ諸君ニシテ爭ヒ死
セハ誰カ嗣君ノ爲メニスル者アラソ事終ニ止
ム道雪ハ善ク士ヲ愛シ宮内ハ善ク恩報ス記

シテ以テ談柄トナス

秀忠能ク諫メニ從フヲ記ス

將軍秀忠ノ時ニ當リ天下始テ定ル諸牧伯ヲ召シ土井利勝ヲノ命ヲ傳ヒシム曰ク明年將ニ位ヲ嗣子ニ讓ラントス諸侯皆賀ス井伊直孝默然トノ獨リ賀セズ利勝竊ニ招ヒテ其意ヲ問フ直孝ノ曰ク天下始テ定リ土木屢々起リ諸侯徭役ニ勞シ窮モ亦極ル今又位ヲ嗣君ニ讓ル諸侯貢獻ノ禮幕府大饗ノ設ケ下民ヲ剝奪スルニ非ヨリハ安ソソ其費ヲ償フヲ得ンヤ百姓苦ミ天下

病ム亂此ニ由テ生ス吾賀スル所ヲ知ラズト秀忠遂ニ其言ニ從ヒ諸侯ニ謝ノ事遂ニ止ム

第一銀行ノ記

府下商社ノ盛ソナル屈指スルニ暇アラズ而ノ變遷ノ速ナル亦此ニ過タルハナシ疇昔第一國立銀行蓬萊社小野組島田組ヲ以テ四大社ト爲ス今時小野島田ノ二氏衰ヘテ復タ振フ能ハズ第一銀行ハ海運橋ノ東岸ニ在リ岫嶙タル樓閣半空ニ浮ヒ莎笠ヲ戴ク者首ヲ仰ヒテ尚其ノ上頭ヲ見ル能ハズ貨財ハ天下ノ通宝也之ヲ私ス

レバ則商ヲ傷リ工ヲ害ス必ス公共ノ道ニ由ル
第一銀行ノ如クナルベシ故ニ世或ハ之ヲ商社
ノ師ト云フ諸銀行ノ來テ法ヲ取ル所也

太陰曆ヲ廢スル記

明治五年十一月太陰曆ヲ廢シ是ノ歲十二月三
日ヲ以テ六年一月一日ト爲シ因テ詔ノ天下ニ
告ク曰ク朕惟ソミルニ我カ邦頒行スル所ノ大
陰曆ナル者ハ太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ建ツ故ニ
二三年間ニ必ス閏ヲ置サルヲ得不然ソ閏ヲ置
ノ前後ニ時ニ季候ノ遲速アリ終ニ推歩ノ差ヲ

生ス殊ニ旧曆中ノ下段ノ如キハ揭クル所率ネ
妄誕無稽ニ人智ノ開達ヲ妨クル者少トセズ
太陽曆ナル者ハ太陽ノ躔度ニ從テ月ヲ建ツ日
ニ多少ノ異ナルアリト雖氏嘗テ季候遲速ノ變
ナシ四歲毎ニ一日ノ閏ヲ置ク七年ノ後僅ニ一
日ノ差ヲ生ズルニ過キサルノミ之ヲ太陰曆ニ
比セハ最モ精密トス其便不便ハ固ヨリ論ヲ待
タズ是ヲ以テ今ヨリ太陰曆ヲ廢ソ更ニ太陽曆
ヲ用ヘ以テ永世ニ傳ヘン百官諸司其レ斯ノ旨
ヲ体セヨ其ノ後民間或ハ曰ク曆ハ專ラ種植ノ

用ニ供ス而ノ新曆ハ農事ニ便ナラズ事聞ノ更ニ太陰曆ヲ併セテ頒行スト云フ

大坂ノ役ヲ記ス

大坂ノ役ニ金瓢ノ馬表天王寺ニ進ム関東ノ將士訛言シ此ノ行ヤ秀頼自ラ陳ニ臨ミ幸村之ガ先鋒タリト諸隊怒ラズノ威レ全軍大ニ乱ル井伊氏ノ臣小笠原傳兵衛男及ヒ僕ト直孝カ棄ル所ノ馬表ヲ收メテ之ヲ樹ツ全軍之ヲ見テ伊井氏ノ軍反シ戰ノ者トナス一軍復大ニ振フ此ノ時ニ當ツテ直孝猶ホ且ツ軍ヲ挺テ表ヲ棄テ走

ル若シ小笠原ヲノ偶々馬表ヲ樹ツルノ事ナカリセハ如何ナル状ニ止ムヲ知ラズ兵ハ勢ニ在ツテカニアラサル此ノ如シ事ハ五月七日ニ在リ

秀吉鎌倉ニ游フヲ記ス

秀吉北條氏ヲ小田原ニ圍ムニ當ツテ一日鎌倉ニ遊ビ頼朝ノ塑像ヲ觀ル進テ其ノ背ヲ撫メ曰ク汝ハ我カ友也赤手ニシテ天下ヲ取ル者唯吾ト汝ト有ルノミ然レモ汝ハ源氏ノ名族ニヨツテ起ル吾ガ識田家ノ奴隸ニ起ルニ及ハサル也吾

遂ニ地ヲ略シテ明ニ至ラント欲ス汝以テ何如ト爲スヤ他人ヲシテ此ノ語ヲ吐カシメハ一場ノ大言ニ過キズ秀吉ニ在テ固ヨリ過ルアツテ及サルナシ英雄ト云ハサルヘケンヤ

祝辭部

某氏ノ子初メテ學ニ上ルヲ祝ス

君家ノ某子夙ニ伶俐ノ稱アリ之レニ假スニ學問ノカヲ以テセバ磐石ノ基礎ニシテ善良ノ木材ヲ用ルガ如シ他日隣里其ノ子ヲ戒ムルニ某家ノ子ヲ見ヨ汝カ如ク進歩ノ至ラサルニ似ズ

ト云ハシメシ願クハ夙夜課業ニ從事ノ吾人ノ預メ某子ニ望ム者ヲ見ルノ速カナルヲ祈リ聊カ祝詞ヲ奉ス

同學ノ卒業ヲ祝スルノ文

凡ソ事勉メテ效ナキハナク效ナキ者ハ勉メサレバナリ君今衆ニ魁ノ卒業証ヲ稠人廣坐ノ中ニ取ル者ハ拔群ノ勉強能ク今日ノ榮耀ヲ致ス所以ンナリ然レモ男兒ノ爲スヘキ者此ニ止マラズ君ノ事業他日ノ成就スル所量ル可シヤ余輩祝辭ヲ進ノ刮目ノ他日ノ大成ヲ待タンノミ

某女子初テ郷校ニ入ルヲ祝スルノ辞

本邦古來女子ノ教育ニ乏シ明治文明ノ運ニ際シ始テ女學ノ成規ヲ設ケ天下ノ母タル者ヲ女子ノ務ムル所ヲ知ラシム今回君家令女ヲシテ學問ニ從事セシム冀クハ女子ノ性行日ニ進シテ國家女學ヲ設クルノ盛意ニ副ハンコトヲ爰ニ一言ヲ進メテ此ノ舉ヲ賀ス

小學校開業ノ祝辞

事豫メセサルベカラズ幼ニノ教ヒナケレハ長ノ後悔ユ是レ庠序ノ設ケアル所以ナリ今茲

某校經始ノ功竣ルヲ告ク衆委員今日ヲ擇テ該校開業ノ第一日ト爲ス小生席末ニ陪從シ一言ノ祝規ヲ奉セントス始メ盛ナルヲ要セズ終ノ衰ヘサルヲ要ス名ノ立タサルヲ患ヒズ實ノ舉ラザルヲ患フ諸君此ニ眼ヲ著レハ該校ノ隆盛ナル立テ待ベシ

新年ノ祝辞

履端ノ佳節億兆肩ヲ休ヘ衣冠天ニ朝シ聖澤四海ニ溢レ人情自然ニ和ク君喬松ノ壽ヲ迎ヒ僕南山ノ祝ヲ陳ヘ謹テ新年ヲ賀ス

新春ノ祝辭

東皇令ヲ布ヒテ祥雲四ニ舞キ梅臉笑ヲ含ミ柳
眼睫ヲ開ク千里春風ナラサルハナシ壽酒一瓶
松魚一尾恒例ニ仍テ左右ニ呈シ以テ迎春ヲ祝
スルヲ証トナス

男子ヲ産ムヲ祝ス

熊羆ノ吉夢積善ノ家ニ結ヒ爰ニ令嗣ヲ榮誕ス
休徵疆リナシ龍ハ固ヨリ龍子ヲ生スヘク必ス
池中ノ物ニアラズ他日興家ノ兒出藍ノ才君カ
家ニ出ズノ誰ニ期シベケンヤ短簡ヲ脩テ祝詞

ヲ陳ス

女子ヲ産ムヲ祝ス

萃堂錦ヲ添ヘ蘭房ニ弄璋ノ瑞アリ令閨ノ喜ヒ
知ル可シ淑善ノ美德夙トニ顯レ窈窕ノ麗容長
ク榮フ必ス盡期ナキヲ保クソ平素家庭ノ訓誨
郷里ニ著ル女徳成リ婦道正シキハ口舌ヲ待タ
ズ謹テ祝ス

某翁ノ八十初度ヲ壽ス

某翁今年齡八旬ニ至リ矍鑠ト愈々壯ンナリ翁
平生慈善ニノ貧ヲ恤シ施シヲ好ム攝生ヲ慎ミ

テ勤メニ倦マズ郷里其ノ徳ヲ推シ子孫其ノ慈ニ懐ツク是ニ於テ萬口齊ク唱ヒ協力周旋メ爰ニ壽筵ヲ張ル謹テ壽詞ヲ奉シ萬壽疆リナケン人ノ古稀ヲ祝スル辞

某翁行年七十ニメ猶嬰兒ノ色アリ天休祥ヲ重ネテ家門益々隆ンナリ古來稀ナル者翁優カニ之ヲ有シ親族故舊觴ヲ奉メ壽ヲ昌大ノ筵ニ獻ス天ノ善ニ福スル翁ニ於テカ之ヲ信セン

友人ノ病瘉ヲ祝ス

君偶々微恙ニ冒サレ病床ニ在リト聞キ趨リ往

テ之ヲ看ル神志憐然トノ復タ平生ノ豪氣ナシ窃ニ憂慙ニ堪ヘズ某名医ノ診察ヲ受ケ藥劑一旦功ヲ奏シ今日病蓐ヲ收メテ慶筵ニ換フルヲ得タリ滿堂ノ賀客觴ヲ舉テ歌ヒ且ツ舞ヲ僕ニ於テ固ニ辞セサル所ナリ

某橋落成ノ祝文

渡津江河舟筏ヲ用ヒン乎橋梁ヲ架センカ舟筏ノ便ハ橋梁ノ利ニ若カズ而氏暫ク勞メ長ク逸スル遠謀アル者斯ノ此ニ從事セサレハ舟筏ヲ以テ便トセサル者幾ト稀レナリ吾カ郷某川舊

ト舟筏ヲ用ヒテ便トナス維新以後人智頓ニ開
ケ三尺ノ童子モ舊弊ヲ談スルヲ耻チ義務ノ在
ル所ヲ知リ一郷活眼ヲ注キ爰ニ談橋ヲ架スル
ヲ得タリ是レ啻々人民行路ノ利ナミナラス抑
ク一郷開明ノ初步タリ諸君ノ爲ノニ賀スル所
以ンナリ

論說部

寸鐵人ヲ殺スノ說

○幾ハ固ヨリ以テ寡ニ勝チ可クシテ小ハ固ヨ
リ以テ大ニ敵ス可カラサルナリ是レ誠ニ尋常

席上ノ說ノミ兵庫ニ萬億ノ干戈ヲ藏ム皆悉ク
銳利整ヲ断ルニ足ルモ干戈自ラ運用シルノ活
機ナレ況シテ鈍ク且折ル、者ヲヤ百磨千煉ノ
人能ク之レヲ運用スレハ寸鐵以テ人ヲ殺スヘ
シ昔者桶狹ノ役ニ義元亡ヒテ信長興ル大モ未
タ恃ムニ足ラズ而シテ小モ亦未タ自ラ棄ツベカ
ラサル也

水ノ說

水ハ動植物ノ養液ニシテ覆載ノ間一日モ欠ク
ベカラサル者ナリ其性蓋シ諸液中分子牽引ノ

力最モ薄弱ニシテ平流皆能ク應動浮游ス其質タルヤ水素一分酸素八分抱合ノ成ル試ニ燭ヲ點ン玻璃罩ヲ以テ之ヲ覆ヒ久シテ火勢衰微シ終ニ滅スルニ至レハ其罩内ニ水點ノ滋潤スルヲ見ル是レ燭中ノ水素ト空氣中ノ酸素ト抱合シテ成ルノ一証トナスベシ

電信機ノ説

電信機ハ坐ナカラ信ヲ萬里ノ遠キニ通スルノ要機ナリ此ノ機ヤ泰西ノ學士天造ノ電氣ヲ實驗シテ物トシテ此氣ヲ含有セサルナキヲ發明

シ遂ニ此ノ機関ヲ設クル者也其裝置スル所ヲ詳ニスルニ各所ニ於テ適宜ニ木杆ヲ樹テ杆頭ニ鍍線ヲ連ネ施シ線端盡處ニ機局ヲ置キ其始メ鐘鈴ヲ鳴スヲ以テ其號報トナス聽ク者報アルヲ知テ機面ニ臨ム乃チ指鍼機アリテ其要字ヲ指示シ之ヲ記シテ以テ通信ノ文字トナス實ニ精巧尋常人ノ及ハサル所也宜ナル哉人或ハ妖妄信ズヘカラズト云ヤ

挿秧ノ説

農家終歳田畝ニ從事ノ曾テ安逸ニ就ク能ハズ

即チ一夫耕サレハ十口飢ヘ一婦耘サレバ一家
苦ム何ノ暇アシテ安逸ニ就クヲ得ンヤ其ノ收
穫ノ實ハ三秋ノ間ニ過キズ而シテ其初ヨリ指ヲ
屈レバ枚舉ニ堪ヘズ余姑ク挿秧ノ期ヨリ断ノ
起頭ト爲シ秋收ノ期ヲ以テ結尾ト爲シ其ノ用
カノ如何ナルヲ詳ニセントス如何セン是亦其
ノ多數ニ堪ヘズ一言之ヲ蓋フ曰ク順ニ施シ漸
ク收ム如是ノミ若シ今ノ秧ヲ以テ米何クニ在
リト曰ヘハ余笑テ答ヘサラントス

文ノ説

荆山ノ璞美ナリト雖ヘ氏琢磨ノ功ヲ加ヘサレ
ハ連城ノ名ヲ成スニ足ラス文モ亦何ヲ以テ異
ラン文ハ美ナリトイヘ氏刪削ノ功ヲ積マサレ
バ人ノ心ヲ服スルニ足ラサルナリ五彩爛然ト
ノ布置宜キヲ得而シテ後人之ヲ綾羅ト云ヒ錦繡
ト云フ苟モ文ヲ作ル其法講セサルベカラズ是
ヲ文ノ説ト爲ス

良禽木ヲ擇フノ説

獵者銃ヲ提ケ偷眼ニ我カ虚ヲ窺フ我レ吾ヲ忘
レ餌ニ墮野ニ就ク能ク彈丸ノ射殺スル所トナ

ヲサル者幾ト稀レナリ苟モ岑鬱高ク聳ヒ一羽
ヲ窺フ能ハサラシメバ獵者何ノ慕フ所アラシ
ヤ語ニ曰ク容ヲ治フハ淫ヲ誨ユト自取テ身ヲ
害スルハ良禽ノ爲サル所ナリ

水ハ器ニ從フ説

盂圓ナレバ水從テ圓カ盤方ナレハ從テ方ナリ
人ノ交際ニ於ケル從フ所ヲ擇バサルベケンヤ
人ノ入ト相接スルヤ益スル所アツテ損スル所
ナケレバナリ苟モ損スル所アリ何ソ人ニ取ラ
ンヤ唯々其從フ所ヲ擇バズノ漫ニ之ニ從ヒバ

則圓ナラント欲ノ方盤ニ入ルガ如シ水自ラ我
カ形ノ己ニ方ナルヲ知ラズ夫レ身ヲ益スル誰
カ欲セサラシヤ傲然トノ己ヲ損スル者ヲ以テ
益ト爲スハ自ラ擇ハサルノ過チナリ

習ヒ性ト成ルノ説

鮑魚ノ肆ニ居ル者ハ其ノ臭ヲ知ラズ生レナカ
ラニメ而メ之ヲ知ラサルニ非ズ漸漬日久フメ
習ヒ性ト成リ自ラ覺ヘサルナリ此ニ由テ之ヲ
觀レハ善ニ習フ日久ケレハ善性トナリ惡ニ習
フ日久ケレバ惡モ亦性ト成ル故ニ善ニ就キ惡

ヲ去リ自ラ習フ所ヲ擇フヲ知レハ良士タラサルヲ患ヘズ

難ヲ先ニスルノ説

我爲サレハ則人之レヲ爲ス天地ノ間逃ルベカサル者アリ是ヲ人ノ義務ト云フ天下ノ人ヲ擧ケテ億兆ト云フ甚タ多キヲ言フ也億兆ノ人ニノ而氏能ク其ノ義務ヲ盡ノ遺憾ナキ者幾人カアル義ノ盡シ難キ此ノ如シ豈ニ難カラスヤ我之ヲ難トノ務ノズ人務メテ之ヲ爲ス既ニ之ヲ爲ヒハ則易キ者至ル何ヲ易キト云ノ今夫レ國

ノ爲ノニ外寇ヲ防ク力戰シテ之ヲ走ラシ夜襲シテ之ヲ殲クス朝廷其ノ勞ニ酬ヘ國人其ノ功ヲ稱シ是ノ時ニ當テ何ノ難キ之レアラシ易キ者至ラサレハ則難キ者除ケズ故ニ難キ者先ツ務メサルベカラズ此レヲ難キヲ先ニスルト云フ

利害ノ説

利害ニ大小アリ緩急アリ察セサルベカラス今物十アリ利六ニ居テ害四ニ當ル是レ利ノ大ナル者也害六ニ居テ利四ニ當ル是レ害ノ大者也

利ノ大ナル者ハ其害小ニシテ害ノ大ナル者ハ其利小ナリ害急ニシテ而モ小ナレハ則未タ遠カニ之ヲ去ラズ將來ノ利害如何ント見ヨ小害除カズンバ大害將ニ至ラントスルガ如キハ急ニ之ヲ去ル可ナリ小害除カズンバ大利將ニ至ラントスルガ如キハ寧ロ小害ヲ受クルモ大利ヲ喪フ勿レ人恒ニ己ニ利アリ己ニ害アリト云フ而シテ小ニ拘リテ大ヲ失ヒ目下ニ徇ツテ將來ヲ忘ル者ハ其ノ大小緩急アルヲ知ラサレバナリ

循環ノ説

循環トハ環ニ循テ轉旋スルノ謂ヒ也物循環ノ理アラサルハナシ之ヲ四時ニ譬フルニ春夏秋冬ハ一大環ナリ春ニシテ夏夏ニシテ秋秋ニシテ冬冬ニシテ春ナルガ如シ變セザルベカラサル者ヲ變ズベカラサル者ノ中ニ寓メ一大世界ヲ設ク是レヲ上帝ノ微意ト云フモ可ナリ蓋シ春ニシテ變セサレバ物成ルベカラズ是レ變ゼサルベカラサル所以ンナリ春ニ接スルニ秋ヲ以テシ秋ニ接スルニ夏ヲ以テセハ可ナランヤ是レ變ズベカラサル所以ンナリ若シ其ノ大体ノ變ズベカ

ラサル者ヲ變シテ其ノ小体ノ變ゼサルベカラ
ザル者ヲ變ゼサレバ循環ノ理ト相去ヤ遠シ世
人妄リニ奇ヲ好ミ新ヲ喜フ爲メニ此ノ説ヲ作
ル

醉客ノ説

意氣傲然トノ旁若無人ナル者ハ醉客ナリ跟々
蹌々トノ人爲メニ避易シ官道ヲ私ノ意トセサ
ル者ハ醉客ナリ一旦酒醒メテ先非ヲ悔ヒ後患
ヲ顧ルニ及ンテ復々嚮ノ俠骨アルヲ見サルハ
何ソヤ酒力ノ以テ血氣ヲ助クル無レバナリ故

ニ血氣ノ物タルヤ助クル者有レハ旺盛シ助ク
ル者ナケレバ衰弱ス是レ人身ノ攝養ナカルベ
カラサルノ説ナリ

敬スル者人恒ニ之ヲ敬スルノ説

人我ノ相接スルヤ猶ホ形影ノ如キ歟形正シケ
レバ影モ亦正シ我ノ人ニ於ケルヤ之ヲ侮慢シ
之ヲ罵詈シ而ノ人ノ我ニ於ケルヤ之ヲ親愛シ
之ヲ奉養センヲ欲スル是レ形正カラズノ影ノ
正シキヲ欲スルナリ天下固ヨリ此ノ理ナシ而
ノ人ヲ敬セズノ而モ人ノ我ヲ敬セント欲スル

者ハ何ソヤ人ヲ敬スル者人恒ニ之ヲ敬スルノ
説ヲ知ラサルニ由ルノミ

習テ不察ノ説

眼ニ觸レ耳ニ入ル者皆教ニアラサルハナシ人
恒ニ云フ勉強スレハ則富ミ怠惰ナレハ則貪シ
ト貪ハ人ノ惡ム所ニメ富ハ人ノ好ム所也今好
ム所ヲ去テ而レ惡ム所ニ從ヒト云ハ、人必ズ
狂人トナサン然レレ富ム所以ンノ者ヲ舍テ敢
テ自ラ勉メズ而メ貪ナル所以ンノ者ニ從ヒ敢
テ自ラ惰ルハ則自ラ取舍スル所以ノ者ハ好ム

所ヲ去テ而レ惡ム所ニ從フニ非スヤ此所謂轅
ヲ北ニメ楚ニ往クナリ轅ヲ北ニメ往クハ是習
フノ謂ヒニメ楚ノ南ニ在ヲ知ラサルハ不察ノ
謂ヒナリ

家康論

天ノ人ヲ愛スルヤ甚シ豈ニ一人ノ爲メニ億兆
ノ不利ヲ顧ミサルノ理アラシヤ家康ノ大坂ニ
遇ズル世其ノ奸ヲ咎ム余謂ラク大坂ノ事置テ
論セサル可ナリ如何トナレハ當時能ク天下ヲ
宰メ億兆ヲメ各人其堵ヲ安セシメンニ之ヲ秀

頼ニ属センカ之ヲ家康ニ属センカ天騷乱ニ厭
ク久シ生民ノ塗炭極レリ天甚夕愛スル所ノ赤
子ヲ以テ天下ヲ宰スル能ハサルノ秀頼ニ属ス
ル天豈ニ忍テ之ヲ爲サンヤ

秀吉論

英雄駢首雙驅ノ衡ヲ中原爭ヒ智ヲ鬪ハシメカ
ヲ角ベ而メ後其優劣分ル我カ戰國群雄割據ノ
日ニ當ツテ數十ノ牧伯遂ニ天下ヲ宰スル能ハ
ズ能ク之ヲ宰スル者ハ織田氏ノ將校ニ出ツ智
カ世ヲ蓋フ者ニ非ンバ安ソ能ク此ニ至ランヤ

若シ夫レ異域ニ求メ古今ヲ上下ノ其優劣ヲ比
シ其高卑ヲ定ムルガ如キハ必ズ至當不易ノ確
論アルベシ未タ遠カニ定メ易カラサル也

信長論

撥乱反正ノ功必ス非常ノ英雄ヲ待テ而メ後ニ
之ヲ見ル群雄割據メ統一スル所テシ而レ蒼生
其ノ害ヲ被ラスンハ何ソ必シモ統一ノ功ヲ高
トセンヤ物合フ片則相生養シ離レハ則爭奪ス
是非曲直口舌ヲ以テ明カニスルヲ得レハ則己
マン若シ之ニ繼クニ暴戾ヲ以テセハ各々其力

ヲ逞フシ無辜ノ人民ヲ驅迫シテ非命ノ矢石ニ
斃レシメ白骨叢ヲ成シ流血河ヲ成ス坐視スル
ニ忍ンヤ應仁以來人民皆悉ク此ノ慘場ニ生息
メ底止スル所ナカラントス信長此ニ見ルアリ
天下ヲ經畧スル一ニ此ニ出サルハナシ其偉功
必ズ終天没スベカラサル者ト云フベシ

室町氏論

室町氏十餘世ニ傳ヘテ天下ノ宰タリ亦非常ノ
英雄ト云フベキカ曰ク然ラズ此ニ人アリ盈尺
ノ珠ヲ抱ク之ヲ路上ニ投シテ旁人ニ語テ曰ク

是レ天下ノ至宝也其人ニ非レハ抱クベカラズ
ト人信メ収メサランカ王家自ラ至宝ヲ投メ人
ノ收拾スルナキヲ欲シ尊氏信ゼス收メテ之ヲ
懐ニシ愛惜メ之ヲ傷ラズ是レ尊氏ノ天下ヲ取
ル所以シナリ其ノ十餘世ニ傳ル者ハ人民ノ思
想偶々此ニ定ルノミ何ヲ以テ此ヲ証セン室町
氏ノ政一モ人心ヲ厭ガシムルニ足ル者ナシ唯
其ニ三大臣大國ヲ有メ其人民ヲ私シ專ラ權威
ヲ競フ故ニ人民其ノ形勢ニ憤レテ姑ク此ニ定
ル也故ニ室町氏ノ天下ヲ宰スルハ之ヲ偶然ト

云フモ可ナリ

北條氏論

北條氏數世陪臣ヲ以テ國命ヲ取ル世之ヲ咎ム
余謂フ昔時柑ヲ賣ル者アリ或人買テ之ヲ剖ク
敗腐メ嚙ヲ生シ喰フベカラズ顧テ賣者ヲ責ム
賣ル者曰ク其皮ヲ美ニシ其瓢ヲ嚙ニスル天下
皆然リ余レ之ヲ賣ル人之ヲ買フ未曾テ責ムル
者アラズ何ソ特ニ子ノ所ニ足ラサルヤト世ノ
北條氏ヲ責ムル者何ヲ以テ此ニ異ランヤ天下
ヲ宰スル者智カヲ較ベテ之ヲ服セシムルニ非

ルヨリハ名人君ニ在テ其實必之ヲ左右スル者
アリ權ノ歸スル所名ニ在ラズメ實ニアリ豈ニ
獨リ北條氏ノミナランヤ

源氏論

賴朝府ヲ鎌倉ニ開キ霸業ヲ創ム王政復々振フ
能ハズ豈ニ祖先ノ遺業ニ由ルカ伊豆ノ一流人
ニノ臂ヲ奮テ起レハ天下響ノ如ニ應ズル者ハ
亦祖先ノ遺烈ニ由ラズト云バカラズ然レ平
氏ヲシテ兇暴ヲ肆ニスルナカラシメハ賴朝亦
一流人ニ終ランノミ平氏ノ兇暴固ヨリ賴朝ノ

起ルヲ啓クニ足リ而メ平氏京師ニ據テ朝廷ヲ
挾ム我撃テ之ヲ斃シ攻テ之ヲ逐フ亦以テ朝權
ヲ奪フニ足ル豈ニ嘗ク祖先ノ遺烈ノミナラン
ヤ

平氏論

攻城野戰ノ功ハ帷幄ノ算ニ若カズ一勇將以テ
十萬ノ兵ヲ指揮スベシ而メ口舌ヲ以テ匡救ス
ル豈一勇將ノ能スル所ナランヤ平氏ノ亡ルヤ
職ヲ驕恣ニ由ル懿親ヲ以テ言ヘバ則知盛アリ
教經アリ異姓ヲ以テ言ヘバ則景清アリ皆以テ

三軍ニ將帥タルニ足レリ然リ而メ其興亡スル
所以ニ至テ一言モ之ニ及フモノナシ獨リ重
盛焦慮苦心以テ之ヲ匡救ス若シ二三ノ此輩ヲ
シテ同心協力ノ以テ重盛ヲ助ケシムレハ淨海
ノ暴未必シモ止マスンバアラサルナリ余故ニ
曰攻城野戰ノ功ハ帷幄ハ算ニ如ズ

藤原氏論

天兒屋ノ天祖ヲ輔ガル鎌足ノ天智ヲ助クル赫
々タル偉功方策ニ存シ而メ王家ノ衰ルヤ藤原
氏亦之ヲ基ヒス是レ大利アル者ハ必ズ大害ア

ルナリ蓋シ忠ナレハ則寵セサルヲ得ズ功アレハ則賞セサルヲ得ズ子孫百年ノ後祖先ノ寵祿ヲ挾ミ少クモ人ニ下ルヲ肯セズ苟モ人誣ユル能ク一時ヲ制スルハ之レ有リ豈ニ久ヲ持ツノ道ナランヤ王家藤原氏ニ倚リ藤原氏此ノ道ニ循テ改メス其ノ衰ヲ基ヒスル宜ベナラズヤ

正成論

世或ハ正成ヲ論ノ死所ヲ得ズト爲ス其意謂ラク百方死ヲ忍テ後會ヲ待ツベシ何必シモ一死ヲ潔ノ而ノ後忠ト云ハンヤ此レ英雄ヲ談スル

ニ足ラサルナリ請フ當時ノ事情ヲ詳言セン藤房曠野ニ遁レ將士外ニ怨△當時必ス内外沮格ノ勢アリ初メ正成尊氏ヲ窮迫セント請フ義貞聽カス尊氏再燃ノ勢當ルベカラス銳ヲ避ンヲ請フ清常之ヲ阻△藤房ハ文臣ナリ遁レテ深山ニ入り正成ハ武臣ナリ戰テ屍ヲ暴シ皆其ノ所ヲ得ル者ナリ

隆景論

英雄ハ天下ノ耳目也英雄未タ服セサルハ則之ニ天下ヲ與フルト雖氏一朝モ有スル能ハス秀

吉ノ山崎ニ赴クヤ毛利氏ノ君臣手ヲ拍テ追尾
セント欲ス隆景肯セズ遂ニ秀吉ヲ援テ賊ヲ討
シ今ニ至ツテ人其識ニ服ス夫レ隆景ハ戰國ノ
巨擘也深ク秀吉ノ器宇ニ服ス故ニ秀吉ト和ヲ
其後ヲ助ク秀吉ノ天下ヲ取ル蓋シ隆景ノ服ス
ルニ由ルノミ

顯家ノ論

顯家陸奥守ヲ兼ネ皇子ヲ奉ノ任所ニ赴ク尊氏
叛ニ及シテ陸奥ノ兵ヲ擧ケテ入テ援ヒ遂ニ安
部野ニ戰死ス是ノ時ニ當ツテ天下ノ勢ヒ足利

氏ニ傾ク顯家ヲシテ百姓ヲ撫シ干戈ヲ儲ヒ持
重ノ漸ク謀ル所アラシメバ以テ天下ノ勢ヲ挽
回スルモ未タ知ルベカラズ蓋シ京師ハ四戰ノ
地取ルモ可ナリ取サルモ可キ若其ノ入テ援フ
カ如キハ一將ノ辨スル所ニ如何ゾ遠ク孤軍ヲ
懸ケ身邊要ノ地ヲ去リ一敗地ニ塗レ復振ニア
タハサルヲ致スヤ南北之戰ヒ南師毎ニ形勢ヲ
失ヒ以テ敗滅ニ至ル者多シ豈特ニ顯家ノミナ
ランヤ

義助論

惜ヒ哉義助ノ死スルヤ百折撓ハマズ屈シテ益々伸ブ之ヲノ天年ヲ終ヘシメハ南海ノ再燃安ソ賊ノ再燃ノ如クナラサルヲ保ンヤ是ノ時ニ當ツテ天下尚ホ勤王ノ志未タ全ク消セズ幸ニノ一夕ヒ戰テ勝ツキハ則亦以テ四方ノ義氣ヲ鼓舞スルニ足ル然ラハ則新田氏ノ興サルモ亦偶然ナルモノアリ

元就論

量天下ヲ蓋フテ而ノ後チ以テ天下ヲ取ルベシ余曾テ戰國ヲ論ノ謂ラク能ク天下ヲ宰スルニ

足ル者織豊二氏ノ外西ニ元就アリ東ニ政宗アリ當時ノ大勢ヲ案スルニ天朝ヲ尊ビ百姓ヲ安スル者以テ天下ヲ宰スルニ足ル此ノ二者ハ其量以テ天下ヲ包ヌルニ足ラサレバ遠ク此ニ見ルアルニ能ハズ政宗ノ太閤ニ小原ニ謁スルヤ身ヲ縛メ以テ命ヲ聽ク者ハ太閤ノ敵スベカラサルヲシレバ之太閤朝命ヲ奉メ天下ニ令ス是レ當時覇者ノ大義トスル所ナリ政宗ヲ志ス所ヲ贖ハシムレバ亦必ス此ニ出テン諸老將皆物故シ政宗獨リ老成ヲ以テ首メニ太平ヲ唱フ

其國ヲ治ルヤ百姓ノ爲メニ意ヲ用ル至ク深ク
且ツ遠シ元就ヲシテ尚ホ存セシメバ亦將ニ此
ニ出ントス若シ夫レ元就ノ天朝ニ奉スル史策
ヲ照ノ世ノ傳フル所也

且元論

識ノ達スル憲リ意表ニ出ツ且元秀頼ノ傳タリ
太閤ノ恩ニ報スル此ノ時ニアリ故ニ深ク察シ
遠ク憲リ畢生ノ力ヲ用ヒテ坂城ノ安ヲ計ル謂
ラク釁隙ヲ関東ニ開ラカサルヨリ要ナルハナ
シト百方弥縫シテ唯々命之レ順フ群小達セズ

遂ニ不忠ヲ以テ疎斥セラル何ソ其冤ナルヤ之
ヲソ慮ル所ヲ遂ケシメハ假令ヒ大閤ノ舊ニ復
スル能ハズトイヘ氏坂城長ク存ノ今ニ至ルヤ
必セリ

幸村論

天下ニ功德ナシト雖ヘ氏其善没スヘカラサル
者アリ蓋シ當時ニ埋没ノ後世ニ顯著シル百世
其人ヲ待ツテ而メ後明カナレバナリ幸村ノ戰
畧世皆之ヲ知ル然レ氏徳川氏ノ隆シナルニ當
ツテ鬱抑メ頭レサル者亦多シ城坂称シテ金湯

ノ固メ天下無雙トナス然レ凡鳥合ノ師ヲ以テ
天下ノ兵ヲ受ケ危疑ノ地ニ居テ衆心ノ望ミヲ
負フ必ス非常ノ人ニアラサルヲ得ンヤ余毎ニ
愛シ某ノ役ニ候卒來リ報シテ曰ク敵進テ某ニ
在リ時ニ幸村障子ニ靠テ膝ヲ抱ク直ニ答テ曰
ク諾ト睡眠未タ醒メサル者ノ如シ從容トノ餘
地アリ其機ヲ決スルニ及テ脱免ノ如シ以テ物
情ヲ鎮壓シ機會ニ投合スル當時諸將ノ及サル
所ニ蓋シ死ヲ以テ已ヲ守リ苟モ卑屈ノ志ナシ
以テ人心活潑ノ氣ヲ起スニ足ル豈ニ百世ノ下

欽慕スル者無ラシヤ

學問ノ主義ヲ論ス

學問ノ要法ハ他ナシ智識ヲ開明ノ操持ヲ堅牢
ニスルニ在ルノミ夫レ五尺ノ軀幹ニ百体ヲ具
ヘ五官アツテ以テ視聽嗅味覺ノ用ヲ辨シ上肢
ハ把リ下肢ハ踏ム頭腦神ヲ寓シテ百体ノ適宜
ヲ計ル智識ナル者ハ神ノ智ナリ操持ナル者ハ
神ノ勇ナリ然レ凡物ノ適宜ナル者ハ極メテ雜
錯シテ知リ易カラズ譬ヘハ一物ノ形アレバ卑
高廣狹アルが如シ卑シト云フモノハ一尺ニ比

ノ五寸アレバ五寸卑シト云フ如シ一尺五寸アレバ一尺ニ對ノ五寸高シト云ハサルヲ得ズ學問トハ比較ノ術ニシテ比較ナル者ハ物ノ集合ニ生シ集合ヲ見ルノ簡便ナル者ハ書籍ニ若ハナシ故ニ專ラ學ト云ヘハ書ヲ讀ムヲ以テ要トナス多ク讀ミ善ク熟メ之ヲ實地ニ比較スレハ処置ノ適度ヲ得ル是ヲ學問ノ主義ト云フ

文章モ亦欠クベカラサルヲ論ス

文章モ亦世用ニ於テ欠クベカラサルノ一具タリ啻、書牘日用ノ便ノミニアラス他日ノ記臆

ニ供スルノミニアラズ必ズ此ヨリ大ナル者アリ用ル所如何ント顧ルノミニ人ニ善行アリテ傳ハラズ良計ヲ施ノ著ハレサル者ハ文章ノ記傳スルナケレバナリ古者一代創業ノ元勳尚ホ名ヲ竹帛ニ垂レ不朽ニ傳ルヲ以テ志トナス者アリ能ク逸事ヲ探リ筆ノ後世ニ傳フ若シ死者ニノ知ルアラハ恩ヲ謝スルニ暇アラサレントス故ニ余曾テ曰ク文辞善ク之ヲ用レバ以テ死者ノ冤ヲ雪クヘシ

疇昔ノ善侍ムベカラサルヲ論ス

善ハ人ニ在テ固ヨリ當ニ爲スヘキ者ニノ爲サ
ルベカラサル者也故ニ善ヲ爲モ人ノ當ニ爲ス
ヘキ者ニ於テ別ニ一格ノ増ス所アルニ非ス然
ルヲ余疇昔ニ於テ善ヲ爲ス今日ニ在テ少シク
惡ヲ爲スモ何ノ害アラント云ハ、則疇昔ノ善
ハ今日ノ惡ニ於テ前功ヲ併セテ棄ル者モノト
夫故ニ人ノ爲ス所善ノ外ニ爲スヘキ者ナク而
ノ善ノ外ニ於テ爲サント欲スレハ舉テ皆惡ヲ
爲スナリ疇昔ノ善其レ恃ムヘケンヤ
隱タルヨリ著レタルハナキノ論

世人皆謂ラク人心ハ測ルベカラズ我獨リ知テ
人知ル能ハズ故ニ心中ノ善惡ハ必スシモ功夫
ヲ加ルヲ用ヒスト余以テ謬說ノ甚シキ者トナ
ス夫レ上帝ノ神靈能ク人ノ無形ヲ罰スル者ハ
神氣感動ノ我が無形ノ氣ニ激應スレバナリ人
ノ精神亦同一質ニシテ我レ惡ヲ爲ノ感スレハ
彼レ此ノ氣ニ激應シテ自ラ平生ニ異ナル者ア
リ故ニ自ラ惡ト認メテ之ヲ爲ス片則人ニ對シ
必ス活潑ノ氣ヲ失ヒ意外ニ事ノ蹉跌ヲ生シル
モノハ鬼神ノ責ヲ冥々ノ中ニ受ル者ト爲ス語

善ハ人ニ在テ固ヨリ當ニ爲スヘキ者ニノ爲サ
ルベカラサル者也故ニ善ヲ爲モ人ノ當ニ爲ス
ヘキ者ニ於テ別ニ一格ノ増ス所アルニ非ス然
ルヲ余疇昔ニ於テ善ヲ爲ス今日ニ在テ少シク
惡ヲ爲スモ何ノ害アラント云ハ、則疇昔ノ善
ハ今日ノ惡ニ於テ前功ヲ併セテ棄ル者モノト
不故ニ人ノ爲ス所善ノ外ニ爲スヘキ者ナク而
ノ善ノ外ニ於テ爲サント欲スレハ舉テ皆惡ヲ
爲スナリ疇昔ノ善其レ恃ムヘケンヤ

隱タルヨリ著レタルハナキノ論

世人皆謂ラク人心ハ測ルベカラズ我獨リ知テ
人知ル能ハズ故ニ心中ノ善惡ハ必スシモ功夫
ヲ加ルヲ用ヒスト余以テ謬說ノ甚シキ者トナ
ス夫レ上帝ノ神靈能ク人ノ無形ヲ罰スル者ハ
神氣感動ノ我が無形ノ氣ニ激應スレバナリ人
ノ精神亦同一質ニシテ我レ惡ヲ爲ノ感スレハ
彼レ此ノ氣ニ激應シテ自ラ平生ニ異ナル者ア
リ故ニ自ラ惡ト認メテ之ヲ爲ス片則人ニ對シ
必ス活潑ノ氣ヲ失ヒ意外ニ事ノ蹉跌ヲ生シル
モノハ鬼神ノ責ヲ冥々ノ中ニ受ル者ト爲ス語

ニ曰隱タルヨリ著レタルハナシト此ノ謂ヒ歟
序跋之部

瀛環史略ノ序

開明ノ野蠻ト其ノ分ル所豈ニ遠カラシヤ見ル
所ノ廣狹ニ係ルノミ之ヲ譬フルニ通邑ノ邊鄙
ニ於ケルカ知シ邊鄙ノ人始テ通邑ニ來ル特ニ
其風土ノ異ナル有ルノミニアラズ曾テ見聞ノ
及ハサル者比々皆是レナリ此ヲ以テ學問技藝
ヨリ凡ソ百事皆通邑ノ便利精巧ニ如カズ西人
ハ通邑ノ人ノ如シ建國以來他邦ニ通ソ見聞ヲ

廣フシ故ニ此書ノ如キ各國ノ形勢人情ヲ載セ
テ差異ナキニ非トイヘ正要ニ其大体數十年ノ
前ニ詳悉セリ讀者亦此ヲ知ラサルベカラズ今
刻成ル書ノ以テ弁言ト爲ス

國史畧ノ序

國史畧盛ニ世ニ行レ舊刻磨滅ノ讀ムベカラズ
其書肆新ニ木ニ上セ余ヲメ一言セシム漢ト云
ヒ洋ト云フ固ヨリ皆讀ムマシ而メ國史ニ於テ
讀マサル者アレハ猶ホ己ノ財ヲ計ラズメ人ノ
貨ヲ數フルガ如シ國史ノ讀ヘキ者多シ而メ必

ス先ツ此書ヨリ始ル宜ナルカナ盛ニ世ニ行ル
ヤ新ニ木ニ上ス誠ニ初學ノ幸也聊カ所見ヲ書
ノ其責ヲ塞ク

政記ノ序

頼翁學植甚タ富ミ雅俗今ニ至テ其ノ風平ヲ想
ヒ見ル翁將門ノ史ヲ修メテ外史ト云ヒ王室ノ
史ヲ修メテ政記ト云フ皆以テ是非得失ヲ明カ
ニスル所以ナリ其ノ行文ノ典雅政記ノ如ク通
暢ナル外史ノ如キ他人ニ在ツテ實ニ得易カラ
サル者翁ニ於テ文辭ノ餘事ノミソノ議論達識

一々人意ノ表ニ出ツル者最モ翁ノ翁タル所以
ヲ見ルベシ余ヤ其門ニ及ハズ私ニ遺史ニ淑シ
不肖ヲ以テ弁言ヲ辞セサル所以ナリ

某氏ノ習字帖ニ跋ス

某氏夙ニ書ヲ能スルヲ以テ世ニ鳴ル蓋シ諸家
ニ出入シテ古人ノ蹟ニ肩々タラズ遂ニ一家ヲ
ナス此ノ帖童子ノ爲メニ筆ヲ採ル者然レ氏春
蚓秋蛇流動ノ滯ラズ飛舞雲烟ノ如シ疑クハ晚
年ノ書ナラン偶々之ヲ得タリ書ノ以テ家ニ藏
ム

頼翁新居帖ニ跋ス

項羽書ヲ學テ成ラズ自ラ云フ書ハ姓名ヲ記ス
ルニ足ルト而氏亦以テ其ノ人トナリヲ想見ス
ルニ足ル頼翁ノ書法氣節ヲ以テ勝チ者ナリ故
ニ雄峻變化シテ千里一瀉ノ勢ヒアリ古人其ノ
人ヲ愛スレハ其屋烏ニ及ブ況ヤ其ノ筆蹟ヲ見
テ髯ヲ掀ケ手ヲ戟ニシ切齒スルカ如ク瞑眼ス
ルカ如キ者ニ於テヲヤ

顏真卿法帖ニ跋ス

楷書法真卿ヲ推シテ巨擘トナス晩年賊營ニ使

シ節ヲ守リテ屈セス遂ニ其ノ害スル所トナル
ト雖氏侃々タル直節唐ニ在テ指ヲ屈スル所ナ
リ故ニ書法モ亦其人トナリノ如ク宏壯雄健盤
石ニ坐シ泰山ニ對スルカ如シ余ヤ不平ノ氣ア
ル毎ニ必ス一タヒ臨摹シ其ノ氣ヲ盪平シ今其
最モ佳ナル者ヲ得タリ跋ノ以テ其喜ヲ誌シ

日本地誌畧ニ跋ス

其邦ニ居テヤ其形勢人情ノ如キ最モ先ツ知ラ
ザルベカラズ是レ其書ノ作ル所以ニ歟旧本脱
誤多シ今世小學生ノ教科ニ此ノ書ヲ以テ一部

トナス則宜シク謹ヲ加フヘキ所ナリ今再三校訂シテ善本トナシ刻シテ以テ世ニ公ニセントス爲メニ其後ニ書ス

日本立志編ノ後ニ書

志ヲ立ルヨリ要ナルハナシ忍耐シテ撓マス勉強ノ倦マス是ヲ立ト云フ人々志アラサルハナシ唯々大小ノ異ナルアルノミ志大ナレハ大事成ル志小ナレハ小事成ル若シ夫レ難キニ耐ズノ撓ミ勉ムル能ハスノ倦ムハ則事皆成アル少シ嚮ニ西國立志編アリ以テ初學ヲ鼓舞シ而ノ

人ノ志ヲ有スルヤ東西ノ異ナルアルベカラズ今此書ヲ編述ノ嚮ニ西國英傑爲ルアルノ氣槩アルヲ載スル者我カ邦固ヨリ己ニ之レアリ人々自ラ奮フト否トニ係ルヲ明ス此レ編者深意ノ在ル所ナリ

祭文

大祖ヲ祭ル文

維年月日遠孫某謹テ清酌ヲ奉シ庶羞ヲ奠キ敬テ始祖某公ノ靈位ヲ祭ル嗚呼公ノ此ニ家スルニ當ツテ人煙寂寞トノ虎狼嗥ヘ人行稀少ニシ

狐兔走ル公草萊ヲ闢キ蓬蒿ヲ刈リ曠莫ノ野變
ヲ一都會ヲナス物産日ヲ逐テ盛シナリ百姓
其ノ徳ヲ歌ヒ走卒モ其恩ヲ記シ裕ナルヲ後昆
ニ垂ル恭シク惟ルニ慈祥ノ心溢シテ人ニ孚ア
ルニアラサレハ安ソ能ク此ニ與カルヲ得ン不
肖ノ孫盛徳ノ万一ヲ企望スル能ハズ然レ郷人
敬ヲ加ヘ某公ノ孫ト称メ人ノ後ニ立タサルヲ
得タリ庶クハ夙夜怠ラス遺意ヲ奉メ家聲ヲ墜
サズルヲ得テ以テ遺澤ノ深キニ報センコトヲ嗚
呼尚クハ來享セヨ

先君ヲ祭ル文

維年月日哀子某謹テ清酌庶羞ノ奠ヲ以テ大祥
ノ祭ヲ皇考ノ靈ニ致シ伏メ惟ミレハ兎四方ニ
游學シ定省ノ礼ヲ怠ルモノハ大人ノ志永遠ニ
在ルヲ知レバナリ一朝業成リ志贖フノ日郷里
ニ錦歸シテ左右ニ奉養セントス不似ノ兎成功
早カラズ大人ヲシテ恨ヲ含ンテ地下ニ瞑目セ
サラシム兎晨昏骨ニ刺ンテ敢テ遺忘セズ苦ヲ
嚙ミ薪ニ坐メ志業ヲ畢ヘ以テ乃父ノ靈ニ謝セ
嗚呼哀ヒ哉尚クハ饗ケヨ

祖母ヲ祭ル文

年月日哀孫某謹テ祖母ノ靈ヲ祭ル不肖ノ孫呱々ト背ニ在リ提携シテ歩ヲ扶クルヨリ成ク慈恩ヲ被ラサル所ナシ幼志未タ棄テズ万一ノ報ヲ謀ルニ意ナシ何ソ圖ラシ一朝捐ラレントハ爰ニ某ノ忌日ニ當リ再拜シテ聲容ノ靈位ニ髣髴センヲ望ム嗚呼哀ヒ裁尚クハ來リ享ケヨ

某先生ヲ祭ル文

月日再拜稽首ノ某先生ノ靈ニ白ス生ヤ草野ニ長ノ師友ニ乏シ人ノ人タル權利アリ義務アリ

以テ世ニ立ツヲ得ルヲ知ラズ往昔笈ヲ負フテ幸ニ先生ノ門ニ及ヘリ循々ノ教誨善誘ノ切實罷ント欲ノ能ハズ人呼テ人トナス實ニ先生ノ澤ニ浴スルニ由ル何ソ思シ蕙帳人空クノ雙鶴悲ミ阜比長ク冷ニノ一琴塵カ、ラントハ今ヨリ後誰ニヨリテ疑ヒ質シ惑ヒヲ解カン爰ニ釋采ノ典ヲ展ヘ敬テ先生ヲ祭ル嗚呼哀ヒ裁尚クハ饗ケヨ

友人ヲ祭ル文

月日某清酌庶羞ノ奠ヲ以テ亡友某ノ靈ヲ祭ル

君何爲ノ遽カニ同窓ノ好ヲ棄テ幽冥途ヲ異ニ
スル其赴ヲ聞クノ前日偶々君ヲ訪フ微恙アリ
テ風フカルベカラスト云フ衾ヲ擁ノ古今ヲ上
下シ真ニ平生ノ如シ其辞ノ歸リ畧ス意トセズ
退ヒテ安ク寢ヌ彼蒼何事ソ遽カニ我カ友ヲ奪
ヒ學術共ニ談スヘキナク事業共ニ議スヘキナ
ク文辞共ニ評フヘキナカラシム嗚呼哀ヒ我尚
クハ饗ケヨ

幸村ヲ祭ル文

一介生偶々九度山ニ游ヒ慨然トノ感スル所ア

リ如在ノ敬ヲ致シ真田君ノ靈ヲ祭ル噫々君孫
吳ノ畧ヲ抱キ家聲ヲ墜サルノミナラス坂城ニ
弱主ニ事ヘ天下ノ兵ヲ孤城ノ下ニ聚メ妙算神
計出テ愈々奇ナリ不幸ニノ屍ヲ草野ニ暴スモ
千載ノ下君カ獨立不羈ノ風ニ感セサランヤ世
ノ變遷ニ遭遇シテ君ノ風采鬱トノ展ヒズ今九
度ノ山河ヲ弔ノ英風ヲ欽ス尚クハ來享セヨ

作文的例卷之五終

明治十三年十一月廿四日出版御届

定價金貳拾五錢

東京府平民

三木權一

編輯兼
出版人

東京府下四ッ谷區四ッ谷
左門粁八番地

